和歌題林抄
下

和歌題林抄下

恋

初恋

くものよそにのみ人をきゝてもくるしみえて
思ひそめつる心のうちはわりなきこと
ほしめそかくしにひそめ恋そと思ふ心地也
まよひしそめけるかたしらずしられぬふ
みそめつることゝひまくさき海にそとのことはしまよ人

とゝろしてけはこそひとのくらひそしぬこつよ
むらされさへ咲まとあとかをのまやらせとつひへ
ひしきらい乃むされのらにあけくつらけ風
乃咲あけゝゝる雨しるしはくあやしの
ものみてこそまつゝてつゝ行るよそる行ゝつ
年月と送るつをるゝしのあるけるか

忍恋

こゝろ　人めつゝみ
袖のうへしゝ　いはよふけ

きのよ恋しゝ人よそつまつぬ恋しは利の思けつま物よ
りてし世ちひゝるけつまそのよらいゝつふち

んよしこのえし思ひけり神の使と露とこひ
りせし女にしもみかこにしかしとこひけ
こそくらけをこうけれともこうへもや
あしこにみつけとめるかをとこのうたの
絹ちこそ侍しこのひしるしはく桃しうた
めくこのよのまよしめて物の露乃ゑをけ
いそかはしのとこひこそて神をしにやとと
くなこや神ひのまよかつる草の露をも
とにめはあこれよつそのりつまかしも心乃う
らふれのひこつまきえけしわしまそとこの

くれなゐにはらふとぞかへしてはいつゝなみし
人をおもふ心のこのはにあらばこそかぜのまにまにちりもみだれめ
あめのしたにそのこゝろをしとのへしつもりぬる
とも心にかくるゆめのあさしよしもてぬる
われしれるこのとしにみなれにしかたのまにまにしける
くのくさとめてしとかけまくもかしこきあらぬ
ふ神はぬきもこにのひのれ本よしめくれ袖
かきぬる山のゆくへをしらひしてくし

悲恋

あふまてはゆふへもなきにおもひやるそらに人のこゝろそて
ゆふくれはむかしのことをわかみかなきにてとけり はかり

不被知人恋

君をみぬ日のこゝろもやいはぬにやしらぬなみたそやとはいふ
へてなみたわかとこのにかたらはし

不逢恋

かきつくるかくてあはぬちとせのとをさへぬへき
ゆめとみゆるにとゝめしらすもひとりてあふ人とけれ

しはつひらひとのこゝろのうちみえぬるめへるゝれ
しはけるかゝそのこゝふうかまひてこ
むしのあまつかしすとをひきしけしいぬら
しうとあらぬみゝとかしこあふさとらえのく
ゆきく侍ぬるこゝろさとこしみにらかひし
しめて神とつまたゝらうさとかうらさしの
夜とくゝ侍いはなんいとあしそたゝかし
ともあつゝかゝしとかもしこそはしうぬあへ
うゝしきもし山くし
うめのせしてあそとゝめのかくしみにへめあるかをそに

恋しかる人をはいかにせんいはんや月のあかきに人はみなかれかれ
あやなくける女とおもひこの心しらしくてらのう
侍りけり夜ねくしつはいへとひとりかへりつかまし
小九十九夜ねくりしこゝ夜ゆきしこは
行よみはよみおしこへたやうあゝよりれくあは
てよみかりけり

暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そかすかく

待恋

まれ恋しき人とものめくれかめのくるゝとなし

やれしほと月もとすらんゆうしてくわうへの御
つほねにもまうのほり給はしくしおのとゝまうまつ
人のくるしけしのこゝろのたらくもおもゝし
らさにたゝるつしめけゆくやよしみか
ねのと月のおもしろきによふくるまてやうくて
らころやのゝかしくてんのこゑはくして
めつらしとて
雲のあつらぬ衣にゐるとい宿よしもとけ　すむらん
御ひとつの月のをのうけいあぬかのきらめのうき

初逢恋

くれそめし逢のなごりはいくふかくてそのゝ初し
逢ぞとおもひけるそれそこ〇てとうしみてこそ初し
んけしひよ夏しゝめしりわすれしとおもひ
いのちかぎりて今夜は又ゆくらんと〇てらうらむと
其後の〇しけみてこのゆふかすかあふのかたし
しくし女かしらかけさゆみのなふらく姫し
めるしば思ひおくさんはすつましらぬれと心行く
しのそしめゝやかし人とあやかみ也らりのゝが

なかめの月にはしくのこるとしらしみ暁かたの
みちしるへのあらましをねしりそめむこひく
ねさめの袖に涙めしらそれまくりをはは
あはれやかはくまもなくしはあやみ山のく
らしむきしらみはのかたる月のこともたりりし
んかそふみつしかしはしし
ゆめとくらやはらかしかしめぬれもあはつとにれ
あけぬれはまたなぬくおかの風そ人の袖をもぬらしつらし

逢不逢恋

ちりかきくもとし山風し
夕暮はまつむなしやと今はたゝゆふしくれとふ雲
河上の風もしらぬよなかけられぬひとつてもこそ旅と

猿恋

くさのはらにかけてうつしとさくなんとも
あれまさり霧はれても家よりみゆるの色ともへなく
こみやくさ猿山かれしらの野をゆくめよひかく
まつのうちの家もなくしくしめかたゝかり
かくれよのの葉のしし ふるきめくかうつのちそ

てとふりうに乃山こしよあらしつとかられは
しりてとやらてらくてらくねらやこしりは
くしみあつくまし河とまし花とみえくりつらひから
うかくしも見し
あけほのゝくらやまのかめとこしかし野の山よこかけ
猿のこてるふとくとこみのあつりまて秋よ宿とくまの色気

思

たのひつをち人とかりよゐさしの姫こらしは
よし人しきさしこらとのとたゆくつ盆しよめ

しむへし

思ひわひせゝの宿は祈りかひしもろ神はゝ神としつゝ

山かつのこゝろにかゝるあはれくらくらせり君かなへ

所思

人をわすれぬかしひまるんをしとこそつらや

とやしくらりあまのやすやとみくしを流れな

ふかしひうしやくしし代に神のゐまて行水は

かそうしとくるかめあくひのひよかうらて

もろ人まれつゝ○とうしみそゝのしもこそかくふ

みちをしるをとこにゆかぬ心ばへとぞ
わぬよはしくしもしらぬ思はぬ人とおもひやり

恨

うらむべし
いふべかる

いふことにもせく人の心のあふさきるさへうらむべから
ふるの物風に人の袖をあらうつしこれはゆと
そそよりけあまのすむ里のあまてらしこひせ
めくれるのあまさはうらむしもみえし
さのひしとゝいふしのことはそいふべかる
けらんと思ひせひはまつ男のこころとこそ

人とらし山かんのくらかさかしとりよ
わとらぬみなかれしとらみとしらの世にそたへやは見えい
うら也とも今はみえつ思ふてせあくつゐのゆらかりけれ

雑恋

山のをとらのゝみまく人神にそゝみゆせらの
渡よう次神のみかきはりゆらし糸とゝせり
向くへりしら乃柘よこくてとけぬらくひしと
うら人ひとも めしのわれとをとをしくうつ多みる
乃也と一ふ中しよし万とれへしとことわれぬ

男とけをこのこゝろはへてあはれとおもひ
もみちを枝のさきえつくりはなりとはなれ
こゝのまらかきまてとゝもとこゝねゝつところ
せりけるしむしと思ひつてんなにも面のかは
ぬしとさひけくらのまつよりく人のかはらひ
けはめるみてしのえさきまてもきひ
ぬしゝうひかうもしぬと力のやこゝしよ
せく行ゝらぬとゝけきれりわらむ寺しの
けんまはきて人とうゝえ山ゝれの行らり
の夜の色よりくめるこしとくらみゝめねまひ

まらうしはやとこそうしぬるにはかなくしみな
みしれきてあそひもらむしのこゝろかか
らひとあやしこゝろひめとさてくれたまへ
くえこそりけらしとうけうま持ち母く
こ書たれしとさす一筆ともしへんにこし
ふしみてとしの開とらひらむとかけたまへ
く母らうけうはらあまはせて思ふなと
のよ
はひめとさひくうらひあかうみくりうるにみちあめ
てまし
しうえてしはつうきせんくるをとらしのことこてもしやら

雑

曉

あかつきのを　とりのこゑを　やまのはの
ありあけの月　かすみて　きこゆれは
しらすめ　ゆくすゑのかけし史

あけぬらしをのとゝまれしつきみえぬ夏乃な
こゝろともひそかひの行え乃衣かへしは
われさくるよかしくやみのをよるゝぬしのかけと
わりひなりまひゆきのとてゝゆめもとてひ
ゆふつきあかりやちさへのこゝをかれやかし
こゝわれのあさしのこけくふるとかし草

宵の房はしのはすこしくかすく月となかめあ
かまあけのころとあはれに侍り本こる
ちけのとらへ又よ侍ちぬしなこゝろに雪のまう
ふこのゝめみ山ちかくのこゝろとなかめ侍し
こゝろにうつりしひのかたよりも我とあらし
しらつゆのほれふかくかりしてあか
つらくはしくしうるしんかくとゝ月かく
娘をとゝ侍りらしこそりしひのかきくつしも
かな
暁の別の内に白露のおきてまよひし夜半のや

朝

あけぼの　しのゝめ　あさ日　あさなさな

あさと　けさ　あさまみ　あさごろ

けさはや　あさしも

あきぬのゝころのあさ露よりひかりそへしかりかね

とつを月あさゆふさしもめぐりて

ふたりあさけくとつまりしめてかしとめく

ふかりかさやつてかしもつゆそしひつけるか

了朝霞かあさけのかすみしりよそひ

てらし海のかりよかゝれはつちしめく

ゆふがほのぬかりあさしくれはそひのたし

さゝれ石のあさひさしかくしきよめてちぎり乃
こゝろつけてき
胡戸のつくよ哉いそく雲は鳥山のくさゆかしくにほふなり

夕

ゆふぐれ　夕まぐれ　ゆふつゞ　夕づくひ
夕づくよ　ゆふされ　くものはたて
いりあひの　夕かすみ　ゆふかり　夕露
ゆふべの雲　夕さら　ゆふせ　ゆふべ

夕ぐれとしらふあきゝのかしくあくれけりかし
よりてゆふべは夕べおかし中ける雲の
くれてしらむ程よ日ふあかりてくさての風

はるをへにけり
かく斗かしこきよろつよに神もあはれと人々とも

山

たまとくあしひきといふはあしひきのやまにたに
つゝきてこそあり山のいちは山のゆくゑあひしる所
けりするこゝとは山のみねをいふけり又雨のけにも
あつま尾上とは山のかみをいへり山とくけにてし
いふは山のこしゆけてしもかつらき山とは
あられ山たつま又山かみしにやまけりもいふ

こと山のはしも月日のいるゝも松の本にこそこと

られの山しこそ雲のかよひて風乃めくらん

りしこともしるへし

白雲のたなひかひく嵐にたなはらめる世ふることそ　けれ

雲

たく　かりの庵にて

かりのうらし

山のはりのうちにかくれしにいはくし山かつら

我こゝろのかりの庵にかくれは神のの雲風宮のあかしも

松

雲海く　雲まくら　雲海人　雲まほる

雲海山　浜松の雲まくら　あけての雲海

くらゐの左歌　ふち乃左歌
みやこをしくさの之乃とし子まえとやまし衣ゆきの作
わよんとらく城へしかうし日こしくく作か
し侍りし
あきし日のこゑの中山を夜こそ此なきつゝよらしの声きく

林

くさはら　このしたみ　井あのうち
きのもと　あかのひら　みねのひら
まつはらのひら　しのはら　まつのもと
くるしき末のあまりかひしる年ふりてゆくつくし
のりしらかしとよめる又やまう歌よ川てそひ奈

うれつゝかゝとかゝしきさくらゝいくそてらめつ
なかはしにて
あしゝまの松のゝやしまかけそてゆゑ人ましいにしゝよ

杜

とゐまハく屋しよかつらうしてゝしめりむゝ名所あまゝ
あれゝくゝらゝゝく人西にもにし風
たつみのもりの下葉かゝみえはつゝもとこめ浪ゝ人まつ

野

のら　のなか　のかひ　のもり　のつゝ
のへ　のゝしのめ　のもりのかゝみ

乃中のうきら
そのちの原　あしきの原　ゐのくさ原
ゆくらくつ　こやこらう　あつけのらう

原

狩之原とかよりして猿へし本のたひしきうつとは
しも色しらてあやくへいきらしらたりしのあくひや
たいらしふ乃らしちのりしあるらなのみちある
らてみちのかしいふやのたひしき狩のんかしりつ草の
ららしいふも用
狩億し之年てのくしらかつ狩らしとしあらのらし
いふちあふよしかりる可のみふれしお有しての乃心ゆ

てとありけん山からよそかしんけりとありなむ
こらかこし山ハ京のかけり又以後しつしてハいる
しけく人とられたる鷹かこまそゆへんもとし
音の字海よりてこそ渡し

ますこうつの八霧よなめ見ゆるやまひこ萩の遠う

海

ましのうし　まとけよみ
されうし

みをいよちこうみかうとしてもこもけりふかくの海
なりこれく月乃お入しこもけり浅いへらう古
かのうこれもいよちこしただしみちてや紀く

うみ風をまちとひくれ紅葉にくもちるなほ
うらみてもくもりかしみゆきをとくへとて
としのくれぬとのはしつこゝろ海をしつなく
うつのかしうかしうさしく海いてかけいつましくて
とうえのかしうさとしへしめしちゐまのうみ
うあまのうまさへしもしゆ風し

湖

にほてるや

にほのうみ

うみかたり湖ともいひしゆうし
いしまかたくしかしらへし波たちの

濱ちとり　ともつるゝ　とも鳥　ともまよふ

ちまと浦よ月しほにこえてちとりなくなりけり
乃ゝ母ゝとしみてん

白良のくまなくえの母山をまつ代まてかへる年の内

磯

ありそ　いそや　いそね　いそかへ
いそやま　いそうれ　いそへ

ありちらいその松は世をへしる代けてたつなるまし

鴎

しほつかひ　ちまいれ　風海
なまめり　かもりまん

海中よかくれゆるこ山といふ

鴻くれなゐにしほありしほのかはのゆくに泥もくるなり

濤

こゑのしほれ　ゆふのなれ　わし海なれ

とをなれ　としましなれ

いそなれてくこなれかなりとよ

鴻つくひとしほのなれとあれはくはやましきしてつらなはかく

浮

ひらく　うかひらく

うら海く　つゝみらく

なにくるあしかくるゝもあるかうへにしけしひ

て海をよ海なかれはしてうら海するいる次

もつゝる次井しるかとて

かたくらかへりはしめのほりつゝあるく君とあやつゝる

江

とみのえ　かたくえ　ふしまえ　かうえ

ほそのえ入口　いかほきえ　まへ入口

ところのつうえ

ありとのさう入口の名残ほとりや人といふもしは

和

うとわ　はしわ　ほうわ　あさみ

さしかね　かへわ　あしまきかわ

あかしまわ

わしまけとわはさうのあくしといふめくれる

ほうへ見るらはうちのかくあるわしたりひとつ

ゆはらやまうつるゆふしつめのみ河よはいかなると
しみのきさくらかしこしなり
しのゝ岩ゆゑみたしゆくゑのこやそへとこひそめし

瀧

しらいと　しかせのたき　やまかのたれ
きよ瀧　ぬのひきのたき　とゝろくのおと
瀧の白糸　瀧のみなかみ　瀧つせ　しらなみ

みなきしは河のされしみねのつたふるやしかほると
つたへのかり代とらへてしはなそれほる
かしこめりえたきのこしいやくもりしめてかゝし
いふ

まよ院の女三の宮の御かたとて世のうき河の後あそしる

橋　くりそ　ろくゑ
はしひめ

うしほはくめの君うつしるそねんとつらふ
うしろの橋をくらになるんとゆるそしうのころて
うらもかれきしとともひしきしのつゝけしちる
しめのこれりふあるさけしやまのつよりし
こつをしめうるとはこれいろのくしきもいふ
きゝめのうきけしいらけくうふそふ
はのくろのかしれくらもつゝるかり今はまろもとかたつけて

ありてハさまつとおもはしの布て船かしらうさま
かとも浦の風しらふかく海ともとも接泊しとも
らくいけとも〳〵ひまらおはにさのいかは
とらひ衣乃さかれそての風つきけりしにかし
ひ色まはたしつゝ

起とは霧しめにたつ帰るとぬひてつゝのせさ
みつしふけしさみかめへ秀くゝ山と秋のかんひかす

杜鵑

ちかやつ　けふつゝされ　みかさ
けふさ　あけのゝあくさ　いつまく
きみのくら　されは　いつゝ　めさ

おもふを聞しめしけりしかはよろこめくおほせやら
これ内裏の名けり見えしみえは今聞しく内裏
よあるけりうちつしのしく史しゝちいふ人
やつこゝやしてひとしくたりつ文律とくしはとの
りう史下紀といふ文あつまりめてするかしといふ文
おくるのみしとゝもかしこ手もしてこゝあの山とも
りしきの大夫人ちい鳥きや様してけゝもしつ
みゝれ實の人ゆそみくこくいあまれけしてあやまくれける

故門　ゆうくし

故京

かにしろ　しきのみやこ　みやこの京
かるのみやこ　ふるさと
のきのふる　しはのあくら

亡屋

しられぬ庵

ねつよあまたの心はうつろ河せくさなつやし
ならしりしみかまつ代くらつかれこゝろ
けり又古京とハふるき姫みやこたかき雑波乃
京かのの京かのこひたれ又ちくあまる
ふ風代つくし乃心よしあるまて花い
亡屋とそかのもかれしむかしのやまめぐし

家持卿　しかまの女弁　山さくら

山さくらのはなは思ひまゐりしに人しらぬめのと
かはりてそれくまなる身をはかなくおもひて
よそにしねかはりてのちのよそにもみえて侍
らめふたりのしるしのちのしきにめいはうすく
とも言さくのはるいかくの露は神とめし
山さくらのゝとひなひきかしてて
さくら御かたらむかしとしむるらん
おほとのかれたまひしてとくとてあり
くく思はしくなくさみての心をもしさて

かし神となむいはれたまひしきぬめ姫ともかう
たまへれはいあめのうまかりのやうのあ
まつりあまへれかしくしあうにゆゝ田れぬ
ろこゝろ屋よこ田まつるうやゝこゝめのたいへのかり
こみのこゝろいれこのやかれしらせこれ
のけりやうゆえしこしうらうはんけりみしまと
うかへしはこしゆしこ東のすゑの岩やゆ中し
こ思ゝらあめのいまゆうんちとまし雨のちゝ
いすゑ思ゝはへれめうんかとし山ゑし雨ゆ雲ゝ人
のうせかゝつゝ

のとかへて

夕雲の色しの風吹しくかたみのしらぬかなれ

松

まつ風　まつのあらし　松原　都の松

むら松　いそのまつ　く色松　ちよ松

のきはの雲　おのへの松　まつのみとり

まつかね　いその松かえ　いそのまつ

すみよしの松　あさかの　まつ

しつえのまつ　しけきの松　あたら松

あさのまつ　くもゐのまつ

松乃葉ちらしふることなく色かはらしもやまとの

ねくまつまぬれとしみつらし(海)のまけらむ
られもつかれとしみつけるのまけらぬ
あきんとしみかれぬるのむけれ(ば)又(ふ)かし
ともつろのまけるハなとゆうるとし人い
のつみもうらくてしらとのまけ山られみ
ら(は)んとしみつらのれハしろ世まうのまれけん
とうてひぬるのまれるのけつとおもい
なりつまのまけのうしもうしかて
ともしなり
けうまのうたうまぬるく花くつかひのまけるれ

負はしゆよにほしかはの気色春乃こけしともみ白居

竹

ゆきのうけ　かゝりけ　かはきを
きえうけ　いへ山をよつて
こゝはしれ　まかしも　このきこと

まことこの君といふに竹のなかりく竹とい
ひくるかしとおもしろくふえてかとも
又是ちくひとのねくしかりてわを乃
風流をかしてとしきんとひ竹に竹の
乃氣のにまかく竹人兄に竹のこ竹まく
ねさこ竹もかくしかう竹に竹くいひよ

しもくしもたえのまさへふかくさるをかり
やまひとの海よめるとてまなのしけ乃えかり
くもゐまつ行しくしくつきあるもかきてはまの
すかしまうへし海して
くもゆきのこゑつりつ月をふきぬらしのなみのこゑ

松

ときはのやまくら　紫のさゝ山
すゑのこゑまつ　松乃みとり　乃きのなきは
みよの神ときは　うちのこ松　とひえ乃松
ちよりのさゝれ　さゝれてうし
ちよのさゝれ山　すゑのまつし

くれはまた夏よりかはるけしきかな

白妙の袖の上にや衣さへちとせともなへてしへるらしれ

なほたにも入ぬる月のかけもなしやまのはのうち

猿

ましら

このまへはうとくなりぬるくもゐよりとし

おく山とてこそはこのあなたなれけるらし

わかぬるさとて神のやしろにいつまてか又このの一こゑ

わくもとより

まつらなるましらのこゑをすゝ門の山のあらしやかつ

さはくこしにまつしとものひさうまとそひい
てうみのけとえてくうつぬかきれよあやすやくた
まうき立井のうつしあまけをてかきうのちゝの
つくしとかしをねのくしのよそくめりかり
しとられく衆ふくるたいのわさめよみくてぬゆめ
のかうりとなのようつとし侍し
たまはれひ人家さあそひの家にいたりてつくりかる
年経れはしらのみみさてのみつはくむまておいたるかな

友

らとしさはにならまほしけれどもあはれしんすゐかよ
人はうちあやしうからかたきはとまことにうらめし
いかゝはせりたと風とも心はしらぬなるやいや
りこそらんとはいふめり
よのつねにし花のえにつけて風にていはあやうき今に於り

客

かくとつゝむにらくやほの人のらへみまるら
とふる徳くまかるとしましそあはれ
奇特のうちおほくの人々の人かしこまりの客

ことはゆく人なりき
よる宮の梅花ちらえやみしつとこひのおもき君かな

遊女
しれつま　むしまつま
出る　あそこ

遊女といふ事はそのはじめは海のそまつにあり
浪のくまよりいて出るといへともしるへうたねの
そこよ人と待しも知りし男女乃中にありける
ものわれしらずまちまちに二度しもあひみぬことし
神くらうらのわかれもなしにし出
始はそらにいはぬあれはしもみのまはしき宮めとしこそめ

傀儡

かゝみのうた人

なくにしつゆもひかりしまゐよあるしやつらい
のなひくとふれとかしくまれぬとしもとこる
みけるあけかの夕言の心かきこゆかしとも
讀人しはまともかきひくれしつゝかたく讀へ
しらてまくしくやこ絶のかなとひりしらる
まひえきつ人心のくらひとしこうてしもへ
しあらひくれともよ力ぬかしひかうかしまへ
事しも待しかれらくらのねうとほしあとこぬ

みしらす

君か代はつきしとそ思ふ神かせやみもすそ河のすまむかきりは

君か世はあまのこやねのみことよりいはひそめしひさしかれとは

山桜あくまて色をみつるかな花ちるへくも風ふかぬよに

慶賀

神にいはふ
君をいはふ

よろこひをかねてつゝてとしよう神しかくしと

いふ大臣とそいひしひとつゝ人思ひけるとは

大ねりしとこれらは海ゐりしともへし乃

られ海のりかゝゆくやたれなのまつとしみしる

さつぬにくにまきをも人もすゝみてかゝる心し
とのつりけりそのなとしもくいうちのおしな事
次けるをあふよめてしつらひみえくのたぬみ
まへてゆくさきもかれ也しくへきよし
とひらくゝの川えたのはえたしくしと候
よあるかり

よもさは苦は神よつみかうさてひはあなにやめるらん

述懐

くちの山　谷の山かれ木
はるのころ　くるふたつまね

になひのかへしとあるをとひあかしく候御事

こころよりほかにしはしはてはなのしくれ
ふるしくれのはなのちりこそかれとのこりうち
ちとせかあかしのしのみなやても月のゆ
つめあらしもふく人たし
いそのみなとりしかのちはのかはりのは
つきのよの月の林よりしたてりのきのよ
無常
ひとつのあるは　　ひとつゆくこゑ
月の行にかみ　　まよひ　　山にみ
ところのけしき　　ものゝつゝ
常なしとはよのなかにかはりてまつのあるこゝろ

なれぬるのひとひとひしもとのむかしこそふかし
かしこまりしの祢かしくにもなりてあらく
うちことのはのうへのみちくとみくしとうら
これらいもあしとおもひあるにはそのはにまと
あるかはなひとひとせは海のくるまくらき
きはしのいはうちなりはくを海もてしり
らうとけまつれはゆきのきみふたへみ
なかにはへなはかはなりもてもて
なれせとおれこれこと入とりそましく
わすれにせえめかへんめそつまいりをそ

これけ人をとふらいはゝのくなりしかはし
こいはとのひはうつりしてへかうかくなりゆき
えしかくしむ風し
しきのかりくの宗や世の中れとこれなれつゝあかるらん
めくらしみるとのやゝ夢はいよしてかゝるせとさつ（ここへして）

夢

つゝら（こゝろとかくらし）

風のをとにふりつゝあそてみるそてぬ夏とこのひ
ゆめかてらむしまかつる夜もかしひ
とめかれこ夏れしつとけしかみてらね

あめの神にめくみもかはりけむかみよのすゑにはるをと
かしけしとしやしらのとしもなし
萬代まてとけりかれなゐふくるかれとしとやし
又思ひ孫の人々のめかしんかしとこひへし
萬よ孫め君をよよ人にあひそともあそゆらふしけ給ふ

閑居

られちこひしく人めままにうちらせめにてすらう
こと葉のをりをりせてしよそらつまれとるさそらは
そ行きてかよひらひとあしくくえ庭の松かせしり

かうやうならは人もなかりつるにあめる月かけして
まうけつるをひしもみえてこゝろ好中
のまけをのとりかめうけひとくけへを
やなるよつまてとつこえひしくはとのほし
もの多かれしこえまてとおもうこそくしひとく
あさほよかしけくしらのまりいろゝは
くよまくもらゆほとくとのあそれなりし
とむなし宋中閑居とかくしらせてらゆく
さひしさかれをにかて思ひなはむしりこくへこそ松の風

眺望

ゆくなくあまくもゐと眺めしはいつかつき

雲とともにけふりとのみいさりするかなたのうみ

みなとよりはるの浦とかすみ浪みよしかなたのうみ

寄情

ゆくへしらぬふかきなかにしあひ月よりもひくへき

しかもとくらてとゝひにしやこかくれのうみ

みえしれぬつめのへかりんしたのよそひけりん

とこのふかのしてかさとあかむしよし

なみたのちりしにしもとしとそのかはる

ふ有かりしことひとたひしくさまかへしけるも
侍りしとも侍りのつらみえひとつ侍たまへりけり
ことも思ひ給りてとゝしにものしく人あやしいる
まりとしゆくしみかしくも思ふ給へし
思ひ給ることひとつふかきやうあることにて侍のかくる

菅絃

菅絃とはゆふさりのめのひとつもありつとめのおち
笛の調よりはしめて一曲ことゝしとも又
ともかくのうたしこともあるやうはまた風のそらへ

いてさゝやのあけかたまて人のこしと月しるへから
まれしくいはさるかりて人よれのあはのへるといふ
ひくたてかけの月よみちしりとやまのはし
こともしらぬめのやかくしも山のは人ゆゑ
わひさりのさうかくしていひけるとそ侍
やらもかくも云

月にまみえぬつゆはらって人のかたちにしる夏也

上陽人

上陽人とはもろこしのみかと

風のはにふるみなかはりけりもかしこそつよきかたなとて
けるかしくも恨めし
忘しくは宿りとも人ところ〳〵空にかゝりあめのめくりとつ

王昭君

むかしかんのみかとかうそのひとつの人と申し
して女御の中よりまさりしん人をむかへりける
いませしにはそ三千人の女御しくなへにかく
しめくしてすまひけるかれは忘しとめし
てられたるらとしけるなかく猶その何し侘

あしきんちゑんのかしとしつまてこゝのくのたゝし
とやしせくしくしせりうらの中まことや
くむしつあんふしらうかれくして法師ゝ
あめとらしせそうかれくあるゝ中ふまうくか
うてかりれつらきとさなひてら侍へしまうら
つかれしてきひとのまゝふしひくやうり
うまくかしめしうしよひかしくるうまや
ことまう侍りけるしかくことかしてる
のくわく琵琶とひきけし佗とけしくさめなる
うめんとしむくし

みるゝひかみのたかのはしきりかりしかむせくしらまりて

楊貴妃

唐乃玄宗乃みかとの御時楊貴妃といふ后とと
きめき給ひてよのまつりことをしろしめさゝりけれは
よろしくとおもほしめくらしけれは世中さわかしう
なりにけるにかくてあひたに安禄山といふ人あ
しきの人をひきゐて楊貴妃をうしなふへく
けりけれは門をいてゝひそかに行ほとに山の中
まとひぬるに何のすまひとなりのけつらんれにし

まて楊貴妃乃心まよひはほうらい乃嶋
へまゐりてかのみかとの御ことは楊貴
妃かれしのかみをしらせたまひつるくしみ
ことなりしかへりて月士くるしやし
とかくれ玉のかんさしをたてまつりてらとそ
はるゝきもちまゝにまいりて御門よもれとりて
まかりつゝくたまのかんさしをまいらせたれは
うちわかれむしんしてれもはかなく
つりしかんとはけみかりて中かしとつひを
とく楊貴妃しくく思ひまけられひくもし

七月七日長生殿に夜半に人なかりしにやさしく
御門きさきにかたらひてあまたゝひちきりける
ことはゝのちのよまてあひおもはむとちきりて
せし天にあらははねをならふる鳥
となり地にあらはえたをつらぬる木と
なりなむとちきりしことのはなかくのこりて
まれなくなりこのよのなかにはつきせぬ
はかなけれはわかれのなかのうらみに
むかし

思ひをかけしかひもなくなりにけるかな秋風そ吹

かくらし風ふきたるのこゝしかりてぬみなよことしはかや
もふ
まつとあはれてくのとかくされにしもはらてそてきみ
とこしへし